

9 学級担任・教科担任の役割（適切な指導・支援を行うために）

学校園の通常の学級に在籍している支援が必要な子どもたちについて、個々の困難さを見つけ出し、適切な支援を行うためには、普段の様子を知っている学級担任や教科担任の役割が大きいと言えます。学級担任や教科担任は、以下の役割を普段から心がけることが求められます。



早期の気づき

子どもたちが出す様々なサインを見逃さないことが大切です。例えば、「文字をよく書き間違える」等の学習面でのサインや、「友だちとよくトラブルがある」等の生活面でのサインなど、子どもたちのちょっとしたつまずきや困難さを敏感に感じ取ろうとする姿勢が求められます。

原因や傾向の究明

子どもたちが示すつまずきや困難さの背景には、必ず原因や傾向があります。例えば、「指示が覚えられない」のは、①まったく覚えられないのか、それとも3つ指示を聞いたら、そのうち1つは覚えていられるのか。また、②学習に集中しにくい場合は、どんな時に集中が途切れるのか、集中が持続する教科や課題は何か。このように、子どもの困難さの傾向が明確になり、原因もわかれば、支援の方法や頻度を考えやすくなります。

適切な支援

子どもの困難さを早期に発見し、その原因や傾向がわかってくると、その次にはどのような支援をするかが求められます。その子どもに合った適切な支援を行うためには、ある程度の基礎的な知識が必要です。41 ページからの「12 子どものやっていきにくさにどう対応するか」を参考に支援の仕方を考えましょう。ただし、一人で考えないで、校内外委員会で検討する等、組織的に取り組むようにしましょう。

温かい学級経営

支援が必要な子どもたちに適切な支援を行うためには、支援が必要な子どもを含めた学級全員が、互いの良さを認め合い大切にされていることを実感できる温かい学級経営を心がけることが重要です。また、学級担任や教科担任が支援が必要な子どもたちへどのような関わりをしているかの見本を示しながら、周囲の子どもたちへの理解を促していくことが求められます。

【幼稚園での取組】みんなで一緒にリレーをしよう（5歳児）

自由な遊びで楽しんでいた“トラックリレー”をクラス全体ですることになりました。リレーをしたあとで、欠席していたAさんのことを気にかけてクラスの友だちから、「楽しかったから、次はAさんも一緒にしたいな。」という声があがりました。しかし、Aさんは他の子よりも体が小さく、体力もありませんでした。そのため、他の友だちから、「ほんまや。でもAさんはみんなと一緒に（の距離）は走れないよな…。」という声があがりました。

教師がホワイトボードに今日のリレーのコースを書いて、視覚的にわかりやすく話し合いができるようにしました。「短く走ったらいいやん。」という話があり、各々からコースを短くする方法を出し合いました。Aさんはみんなと違うコースを走るの嫌だと思いうい意見にまとめ、Aさんも他の子と同じコースを走って、誰かがお手伝いをするということに決まりました。また、「Aさんはまっすぐ走るコースの方がスピードが出るかも」という友だちの意見もあり、トラックコースの直線をAさんが走るということになりました。

後日、Aさんも他の子と一緒にトラックリレーをして遊びました。Aさんは手伝ってくれる選手2人と一緒に無理なくリレーを楽しむことができ、とても満足そうでした。Aさんがみんなと一緒に楽しむための方法を教師から提案するのではなく、子どもたちが自分たちで話し合い、Aさんにとっても、みんなにとっても一番よい方法を見つけ共有することができました。



わかりやすい授業・教室環境

支援が必要な子どもに適切な支援を行うのは、必要不可欠なことです。支援を進めていくと、Aさんのために行っている支援は、実はAさんだけではなく、周囲の他の子どもにもわかりやすくなっていることがあります。このように、ある子どもにとって「必要な支援」は、他の子どもにとって「あったら便利な支援」と言えます。これを「授業のユニバーサルデザイン化」と言います。31 ページからの事例を参考に、学級の子どもたちにとっ

て「あったら便利な支援」を積極的に取り入れましょう。

保護者との信頼関係

学級担任が子どもの困難さに気づき、適切な支援を行っていくためには、保護者との連携や協力が不可欠です。学級担任は、学校園での子どもの状況や変化等を保護者に丁寧に伝え、保護者の願いや思いを丁寧に聞くことによって、学校と家庭が同じ目標をもって支援にあたるように努めましょう。

学級担任・教科担任へのサポート体制

学級担任や教科担任は毎日子どもたちに接し、支援を行います。その学級担任や教科担任をサポートする体制を校園内で確立する必要があります。4 ページからの「3 校園内支援体制の充実」を参考に、各学校園で体制づくりを行いましょ。また、学校園の組織は子どもたちの様子や所属する職員によって少しずつ変化します。毎年見直しを行い、実効性の高い「チームとしての支援体制」を確立しましょ。



特別支援学級と交流学級の連携

特別支援学級に在籍する児童生徒が、持てる力を十分に発揮し生き生きと学校生活を送るためには、特別支援学級担任と交流学級担任との連携や協力が不可欠です。また、特別支援学級児童生徒への交流学級担任の関わり方によって、交流学級児童生徒の関わり方や捉え方が大きく変わってきます。特別支援学級に在籍する児童生徒には、「学校全体で見守り・関わる」体制や意識を持つようにしましょ。

【小学校での取組】はっきりと話すことが増えてきたBさん

3年生のBさんは、発語が少なく、意思がうまく伝えられないため、「いや！」と言って拒否することが多くありました。そこで、Bさんが少しでもはっきりと話すことが身につけられるように、交流学級での朝の会や終わりの会の司会、給食の挨拶等を毎日続けました。初めは、一音ずつゆっくりと発音していました。交流学級の子どもたちは、Bさんが話すのをゆっくりと待っていてくれました。今では、Bさんも他の子と同じくらいの速さで司会を進めることができるようになりました。また、朝の会のスピーチの時も、交流学級の子どもたちが、「何を話したいのか聞き取ろう」と静かに真剣に聴いてくれるので、発音もかなり明瞭になりました。それに伴って、学級の友だちと会話ができるようになってきています。

